

# 文化、コーヒーと韓国経済

## — 2023年9月のソウル合宿で所感

外国語学研究科 中国言語文化専攻博士前期1年 董令徳

今回の合宿は9月18日から20日まで建築学部と一緒にソウルで三日間滞在した。最初の日の午前中はソウル国立中央博物館を訪れ、夜に弘益大学の付近にある「弘大歩行者天国」という街を体験した。

同じ大陸国家なので、韓国の夜市はどちらかというと、日本より中国のほうがもっと似ている。自分が住んでいる横浜の伊勢佐木の辺も同じく歩行者天国があるが、夜8時ぐらいになったら、観光客の姿が見えなくなってしまった。

韓国の歩行者天国ではぜんぜん違う風景である。夜遅くになって観光客が消えるどころか、むしろ倍増した。道路の両側に立ち並ぶ屋台、輝くネオンサイン看板、頭しか見えない大勢の人ごみ、観衆に囲まれた大道芸人、まるで不夜城に入ったようだ。夜のソウルには夜市が心臓のように強く鼓動していて、街の生命力が感じられる。

二日目は主にソウル歴史博物館と様々な建築を見学した。博物館で展示している地図から見ると、東アジア伝統のまちづくりは現代になってもしっかりと残っている。しかし、実際街を回ったら、そんなに強い伝統的な雰囲気を感じられていな

い。韓国銀行、明洞聖堂、旧京城駅、旧市庁舎などの建物があちこち、一見して「近代」という雰囲気がより鮮明だと思う。もちろん、そうではない部分もある。



高層ビルに取り囲んでウェスティン朝鮮ホテルの敷地にある「圓丘壇」

ソウル中心部にある朝鮮王朝時代の宮殿「昌徳宮」から東向け400メートルぐらい歩くと私たちが泊まっていた宿屋があった。灰色の礎石と青い屋根の間に赤煉瓦と白い石灰の壁が挟んで、雑駁な配線はクモの巣のように少し傾いた電柱から延伸して各部屋に至る。夕方の時、金色の夕陽が屋根に映る。廊下に座り、虫の鳴き声が聞こえるほどの静かな場所で、現代の大都市にいることを忘れたような気がする。

一番印象深い場所を聞かれたら、やはり最後の日に遊覧した景福宮である。現在の景福宮は再建したものであり、元の位置には旧朝鮮総督府庁舎があったが、その旧朝鮮総督府庁舎は同じく旧景福宮の建物を多く破却して建てられたものである。傲慢な日本人は自立自主したい朝鮮人の願望を聞かず、朝鮮半島を支配するため朝鮮王朝の伝統宮殿を破壊し、ソウルの真ん中に征服の象徴として総督府を建てた。そして、七十年を経て、今回は傲慢な韓国人が民族主義のため歴史的な価値にもかかわらず、旧総督府庁舎を解体した。

歴史的な記憶は物理手段で消去できないものである。植民地支配者の日本人もようやく自由を取



韓国マクドナルドの朝食セット、左上はアイスコーヒーLサイズ

り戻した韓国人も、歴史に対する傲慢が同じところに現れ、いかにも奇妙な場所である。  
ソウル訪問について、もし前述の内容を除いてなにかわたしの印象に残っているのかと言えば、コーヒーというものだろう。  
飛行機を降りるとすぐコーヒーの香りがする、と、それほどではないが、空港の通路で並んでいるコーヒー専用の自動販売機だけで韓国人のコーヒーに対する情熱が感じられる。  
しかし、ソウルに到着した二日目、韓国人のコー

ヒーに対する感情はただの情熱ではなく、愛だということを再認識した。

いわゆるコーヒーは韓国人の血液である。

日本にいるとき、わたしもよくスターバックスでアメリカノを注文したが、韓国のスターバックスで同じサイズの値段は日本より約10%以上安く買えることに少し驚いた。マクドナルドも使い捨てカップを使わず、まるで飲み場のような大型プラカップを提供している。

コーヒーは単なる嗜好品という概念を超え、文化として韓国人の日常生活に定着している。韓国特許庁によると、2014年に比べて2018年のコーヒー豆の国内輸入量は94%増え、13・3千トンに至る。さらに2009年の3・5千トンと比較すると、280%増加したことがわかる。

全日本コーヒー協会の調査データから見れば、日本の生豆輸入量は韓国よりはるかに上回るが、2018年は39・9千トンで2009年の輸入量に比べてほとんど変わらなかったため、韓国のコーヒー市場の激しい成長率がはっきり見える。

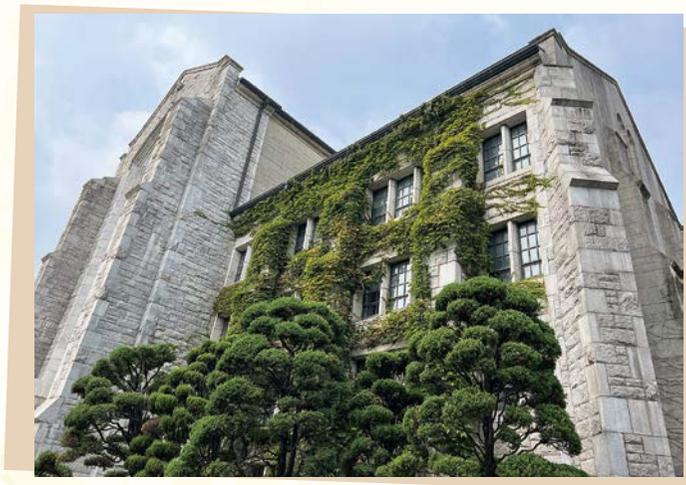
韓国人の好みは伝統的なコーヒーに限らず、関連商品も急激に増えていく。

コーヒー粉、粉末クリーム、砂糖が混合した「ミックスコーヒー」は1976年韓国で開発されたものである。近年、コーヒーに関連する商標の特許出願は2008年までに年間2、300件あまりが、2012年には約1100件、2013年も636件あり、大幅な増加である。出願のうち、88・5%は個人及び企業で、競争の激しさを

感じられる。

ところが、梨花院女子大学に訪問する際に、付近の商店街で見たのは別の景色である。

本来、大学の近くにあるという「地利」を占領し、経営がより簡単になるにもかかわらず、数多くの店は閉店してしまった。経営を続けているコーヒーショップはまだ見えるが、コロナ禍の厳しい状況で、コーヒーショップを含めてライフサイクルがあまり長くないドリンク店の行方はどうなるのかとやはり心配している。



梨花院女子大学の一角